

# 外国語活動の研究指定が教師の意識に及ぼす 影響に関する事例研究

—東京都江戸川区D小学校の事例に着目して—

A case study on the influences of the open research and development about Foreign Language Activities on the consciousness of teachers at an elementary school

—Paying attention to D elementary school, in Edgawa city, Tokyo—

中山 博夫  
(Hiroo NAKAYAMA)

## Abstract:

The purpose of this study is to investigate the influences that the open research and development about Foreign Language Activities to teachers' consciousness at an elementary school. D Elementary School is an ordinary public school. The teachers at the school are ordinary teachers. They are not ones who speak English especially. However, the teachers at D elementary school had to struggle the open research and develop about Foreign Language Activities. So I wanted to investigate their consciousness paying attention to the open research and development about these activities. I have investigated the changes of the consciousness of six teachers which were affected by the open research and develop about Foreign Language Activities at D Elementary School. As a result, I found the three elements about the changes of the consciousness. One is the pressure that they must open their English class. The next one is that the teachers noticed Foreign Language Activities was a class by guidance principals which was based on communication activities. The last one is that they watched children's joyful activities and growth through these activities.

**キーワード** : 外国語活動、小学校英語活動、意識の変容、研究指定

**Keywords** : Foreign Language Activities, Elementary School English Activities, Changes of consciousness, open research and development

## 1. はじめに

平成23年度、日本全国の小学校で外国語活動（5・6年：年間35単位時間）が必修の活動として導入された。これは、小学校教育に大きな質的転換が求められたことを意味する。現在、文部科学省では平成32年の東京オリンピック開催を視野において、小学校5・6年に教

科としての英語を、小学校3・4年では外国語活動を実施することを検討している。さらなる英語重視の方向性である。小学校の教員は、新たな教育課題を突き付けられることになる。

本研究の目的は、外国語活動・小学校英語活動<sup>(1)</sup>の教育委員会の研究指定が、小学校教師の意識にどのような影響を及ぼしているかを探

ることである。小学校教育の中で英語の比重が大きくなっていくのが、現在の動向である。ところが、現在の小学校教諭免許状に関して、教育職員免許法にも教育職員免許法施行規則にも、外国語活動に関する単位規定がない。それは、特別に学習してきた小学校教員以外は、外国語活動に関する学修をせずに教壇に立っていることを意味している。英語という教科が成立し、教育職員免許法や教育職員免許法施行規則に、英語や英語科教育法に関する単位規定が定められたとしても、当面の間、小学校教師の多くは、英語の指導をすることをあまり念頭に置かず、教師になっ教師なのである。そのような教師が、新たな教育課題に向かって指導法研究をしなければならないのである。本研究を進めることは、小学校における英語科や外国語活動推進等の新たな教育課題に臨む教員の在り方に示唆を与えるものであると考える。

本研究を進めるにおいて、事例としては、東京都江戸川区教育委員会の研究指定を受けたD小学校<sup>(2)</sup>を選んだ。この研究指定では研究発表のために多少の予算は付くが、D小学校は特別な人的配置のないごく普通の小学校である。教師たちは最初、どちらかと言えば後ろ向きの姿勢であった。それが徐々に前向きに変化していった。その要因を探求したいと考えたのである。

D小学校が研究指定を受けるに至った経緯を説明する。江戸川区教育委員会は、平成23年度の外国語活動の本格実施を前にして、平成21・22年度の2年間に、区内の各小学校に30時間の研修を行うよう指導した。また平成22年2月には、小学校外国語活動指導資料<sup>(3)</sup>を作成し、各小学校に配布した。そのような状況の中で、D小学校では平成22年度の校内研究を外国語活動に絞り込み、「進んでコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して～外国語活動を通して～」という研究テーマを掲げ、指導法研究に取り組んだ。1年から6年までの担任を縦割りにした2分科会を編成し、そこに特別支援学級担任、専科、養護教諭も参加する研究組織を作った。そして、5年生・6年生の学級の児童を対象として、指導法研究を行った。そのため、ある研究授業では5人もの

教師が授業者としてチームティーチング指導をすることもあった<sup>(4)</sup>。平成22年度末になり、校長は指導法研究を深めるためには研究指定を受けることがよいだろうと考え、江戸川区教育委員会に申し出た。筆者はD小学校のM校長から依頼を受けて、平成22年の校内研究から始まり、平成23年度の江戸川区教育委員会の研究指定との2年間、校内研究に関わってきた。研究指定が終了した場合、教師集団がやっと終わったという意識になり、そこで実践が停滞するケースが多い。だが、D小学校はそうではなかった。

研究指定を受けている環境の中での指導法研究活動が、D小学校の教師の意識にどのような影響を与えたか、どのような要因が教師の意識を前向きに変化させたかを、教師の意識変容を精緻に探っていく中で明らかにしたいと考えた。教師の意識を変容させた要因を洗い出し、それらを意図的に校内研修に取り入れることは、新たな教育課題に立ち向かう力を培うことに繋がると考えたからである。

## 2. 外国語活動に関連した研究の経緯

筆者は平成10年度から、小学校において実際に小学校英語活動の授業を行い<sup>(5)</sup>、授業原理の研究<sup>(6)</sup>、カリキュラム開発<sup>(7)</sup>等を行ってきた。平成20年度からは、東京都内の10校ほどの小学校において、外国語活動の校内研究に関わってきた。それらの学校において、筆者は外国語活動の授業は、学習指導要領で示された「言語や文化について体験的に理解」、「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」、「基本的な表現に慣れ親しませ」ること、「コミュニケーション能力の素地を培う」<sup>(8)</sup>等の目標に基づき、外国語を通じたコミュニケーション能力を体験的に育成するという点に重点をおいた話をしてきた。つまり、教科としての英語とは異なるものとしての指導である。

そして塚本の指摘のように、「子どもたちを当初から英語漬けにしてしまうのではなく、世界の多言語状況を認知させた上で、言語教育をするのが賢明」<sup>(9)</sup>という点についても強調した。また、吉村が指摘しているように、小学校

英語活動が「多言語・多文化主義や共生原理に基づく要請によるものとは考えにくい」<sup>(10)</sup>という点にもふれ、国際理解教育としての外国語活動・小学校英語活動を目指して欲しいという点を強調した指導もしてきた。さらに、各教科や特別活動等の指導においても、母語によるコミュニケーション能力育成も視野に入れて、日常的教育指導を進めることにも力点を置いた指導を行った。指導においては、多田のコミュニケーション指導論<sup>(11)</sup>から多くを学び取り入れた。

筆者は小学校教師と接する中で、多くの教師が外国語活動の授業を実施することに不安を抱いていることを感じた。地域によっては、外部講師にほぼ頼った形で授業が進められている事例<sup>(12)</sup>もある。そのような状況に鑑みて、外国語活動を推進する教師を育成する研究の重要性を認識するようになった。そこで、外国語活動の校内研究が教師の意識にどのような影響を及ぼしたかを探る事例研究<sup>(13)</sup>を行ってきた。本研究は、その延長線上にあるものであり、外国語活動をテーマとした研究指定に焦点を当てた事例研究である。

### 3. 研究の手順と方法

研究の手順としては、まずD小学校の外国語活動・小学校英語活動への取り組みの現状、教師の意識の変容についての要因調査の観点を整理する。そのうえで、6名のD小学校の教師の意識について、インタビュー調査を行い、それを分析することにした。今回のインタビュー調査は通常の社会調査の域をでるものではないが、ライフヒストリー研究を意識した。ライフヒストリーについて、さまざまな定義があるが、川又は「ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録」<sup>(14)</sup>と定義している。そして、その作成過程を2種類に分けている。その一つは文献資料を用いるものであり、「自伝・伝記・日記・手紙・メモなど多種多様な資料」から作成されるものである。もう一つは口述資料を用いるものであり、「調査者が現在生活している対象者に会い、インタビューを通じてライフストーリーを語って

もらい、それを後に文章に書き起こす方法」<sup>(15)</sup>である。そしてライフヒストリー研究のタイプもさまざまある<sup>(16)</sup>。本研究では、ライフヒストリーを意識した口述記録を採用している。それらは、幼少期からの記憶を時間の経過を追った語りから記録したものであるが、外国語や異文化との接触と外国語活動・小学校英語活動に限ったものであり、ライフヒストリーとしては不十分なものである。インタビューでは、個々の教師の幼い頃からの生育過程と教師としての歩みを視野に入れて、研究成果と授業の公開を前提とした校内研究である研究指定が、個々の教師の意識にどのような影響を与えたかを探ろうとした。教師の語りを読み取っていくことによって研究を進めた。

調査にあたっては、山崎が指摘している教師の成長を支える契機、「教師の日常的教育実践の遂行そのものが、その実践の担い手である教師の力量を豊かにするための経験になっている」<sup>(17)</sup>という点を重要視した。山崎の指摘は、教師の成長にとっての教育実践が重要であるというものである。

本研究は一事例研究ではあるが、研究の積み重ねにより、外国語活動を小学校の現場に無理なく定着させ、外国語活動の実践へ向けて一つの方向性は示すことができると考える。また、その他の新たな教育課題に向けた校内研修を実施する際の参考になると考える。

### 4. 東京都江戸川区小学校の外国語活動・小学校英語活動への取り組み

東京都江戸川区ではALT（外国語指導助手、以後ALTとのみ表記する。）がALT派遣会社から派遣されており、多くの場合はALT派遣会社の作成したプログラムで、ALTに頼った授業が実施されてきた。D小学校では、区内の多くの小学校と同様にALTに頼った指導がされていた。

そして東京都江戸川区教育委員会から、平成21・22年度の2年間で30時間の研修を実施するという指導の下で、平成22年度には校内研究として外国語活動が取り上げられた。

平成23年度の外国語活動の研究指定は、その延長線上に位置するものであった。

平成22年度の校内研究のテーマは、「進んでコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して」である。小学校学習指導要領に沿って、コミュニケーション能力を重視したテーマである。そして、1年から6年までの縦割りの分科会で指導法研究を行った。

平成23年度の校内研究のテーマは、前年度と同じ「進んでコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して」である。ただ、区教育委員会の研究指定を受けたことと、分科会組織を、低学年部会、中学年部会、高学年部会としたことが異なっている。

- 4月：研究推進委員会・研究全体会（進め方の確認、実態調査、年間計画等の確認）
- 5月：講演「外国語活動の研究推進」（講師は筆者）
- 6月：研究授業（第1学年の授業、指導講評は筆者）
- 7月：研究授業（第3学年の授業、指導講評は筆者）
- 9月：研究授業（第5学年の授業、指導講評は筆者）
- 10月：研究授業（第6学年の授業、指導講評は筆者）
- 11月：研究授業（第2学年・第4学年の授業、指導講評は筆者）
- 12月：研究全体会（研究の成果と課題の確認、研究発表準備）
- 1月：研究発表会・授業公開・講演
- 2月：研究推進委員会・研究全体会（研究の振り返りと次年度に向けての検討）
- 3月：研究推進委員会（研究の振り返りと次年度に向けての検討）<sup>(18)</sup>

筆者は研修会で、母語によるコミュニケーション能力を踏まえたコミュニケーションアクティビティーを用いた指導を行った。

## 5. 調査者の選択と意識変容の要因調査の観点 英語指導について特別な訓練を受けていな

い、ごく普通の小学校の教師が、外国語活動・小学校英語活動に対して前向きな姿勢を示すようになるためには、そのための意識変容の要因があるはずである。その意識変容の要因を調べるために、研究指定という視点を重視してインタビュー調査を実施した。研究発表と授業公開を前提とした校内研究である研究指定が、どのように教師の意識に影響を与えたかを調べたいと考えた。

インタビュー調査の対象者は、特別支援学級担任や専科教諭等を除いた通常学級の担任から選ぶことにした。授業研究は1年から6年の通常学級で行われるようになっており、通常学級担任が研究指定の影響を、直接に受けると考えたからである。そして、研究推進を中心的に担ってきた教師、各学年1名合計6名に調査の依頼をした。各学年の研究授業の内容に即した教師の思いを知りたいと考えたからである。

6名の教師に共通する点は、多かれ少なかれ外国語活動に対して前向きではなかったことである。そのような教師の意識を変容させた要因を調べたいと考えたのである。

## 6. 東京都江戸川区D小学校の6名の教師の意識変容

### (1) 調査対象の教師

- |          |          |
|----------|----------|
| A：女性、33才 | B：男性、38才 |
| C：男性、24才 | D：女性、51才 |
| E：男性、45才 | F：男性、29才 |

※年齢は調査時のものである。

※インタビュー調査を行った教師には、事例掲載の了承を得ている。

### (2) 調査内容と調査の留意点

調査対象の教師には、下記の事項についてインタビュー調査を行った。

- 小学生・中学生・高校生の頃の外国語学習や異文化についての思い出や意識
- 大学生の頃の外国語学習や異文化についての思い出や意識

- 教師になってからの外国語学習や異文化についての思い出や意識
- 平成22年度に、外国語活動の授業が導入された当初に思ったことや感じたこと
- 平成23年度に、外国語活動の校内研究と研究発表に取り組んできて、思ったことや感じたこと
- 研究会講師の指導や話で思ったことや感じたこと、それによって意識や行動に変化があったこと。
- これから外国語活動・小学校英語活動に、どのように取り組んでいきたいかについて思うこと

インタビューは調査対象の教師の発言の要点を、その場でノートに書き取りながらICレコーダーで録音した。その後、ICレコーダーの再生を基に、詳細なトランスクリプト「H23年度 東京都江戸川区立D小学校 外国語活動 教員インタビュー記録」<sup>(19)</sup>を作成した。本論文中の事例は、そのトランスクリプトから引用したものである。

### (3) 調査対象の教師の意識変容

聴き取り調査の内容を整理したところ、以下のような特徴があった。そこで、その部分に下線と記号を付した。

- ① 研究指定に対する意識に関すること  
：(1-①)、(1-②)、(1-③)、……
- ② コミュニケーション重視等の外国語活動の授業やその成果に関すること  
：(2-①)、(2-②)、(2-③)、……
- ③ 外国語活動の授業を楽しむ児童の姿等の児童の様子に関すること  
：(3-①)、(3-②)、(3-③)、……

#### 【事例1：A（女性、33才）、教職経験9年目、H22年度1年担任、H23年度1年担任】

H24. 2. 21 調査

Aは、小学生の頃はほぼ外国語や異文化とはかわりを持たなかった。中学生になり、修学旅行先の日光で英語を使って意思疎通できる楽

しさを味わっている。英語で外国人に話しかける課題が出され、「その時に、初めて自分から外国の人に話しかけて、習ってる英語が使えるんだ、通じるんだということを初めて知って、それでサインも貰えたので、すごい嬉しかったのを覚えています」と語っている。

だが、英語という教科に対しては、「やっぱり文法とかが難しくって、苦手でした」と苦手意識を持っていた。高校生になると、その意識は「受験の学校だったので、進学校ですか、受験のために、単語覚えないといけなくて…、すごい苦手でしたね」というようになっていった。教科としての英語学習を苦痛と感じていることが読み取れる。

その後、関東地方の私立大学教育学部に進学した。大学生になって、「海外旅行に行った時に、その今まで培ってきた英語力でコミュニケーションを取ろうとして、まあ片言なりに通じたのが、まあ良かったなと思った」と語っている。教科の英語ではなく、コミュニケーションの楽しさを感じたのだと考える。

小学校の教師になってからは、中国人児童の保護者とのコミュニケーションで苦労したようである。逆に韓国人児童の場合には、「日本の風習にもとけ込んでいて、全然苦労はしなかった」と語っている。

外国語活動の授業に対しては、「ALT任せで、そういうものと思ってた」、「自分で授業となるとワアーと思いました、嫌だな」というように、他人事という意識であった。平成22年度の校内研究では、「22年は正直人任せだったですね」と振り返っている。

平成23年度に江戸川区の研究指定を受け、Aの意識は変化していった。まず、「いよいよ自分もT1になって指導案作りから、ALTが先生でいないというところでやっていくのが、やっと実感として持たされるというのが…」というように、1年担任であっても自分の学級で小学校英語活動として、自分が主体となって授業をしなければならなくなったという現実が実感されるようになったのである。(1-①)そして、「最初はすごい悩んだんですけども、とんとん回を重ねていくうちに、とにかく楽しくっ

て」というように変化している。さらに「教えるのが苦じゃなくなった、抵抗感が失せた」、「教材研究している時間が楽しくって」と語るまでになっている。その要因として、「子どもたちもちょっといつもの授業とちがった面が見られたりすると、さらに私も楽しくなって、じゃあ次はこういうのやろうかなあと改善されたりですとか…」というように、小学校英語活動を楽しむ児童の様子があった。(3-①)

さらに児童の変容について、「積極的に、自分から関わるようになりましてねえ。やっぱり1年生って時期は、自分、自分ってなるじゃないですか。まだ、そこまで育ってない。それが、外国語活動の時間に、とにかく人と関わるというのを1年間やったおかげで、人のことを気にできるようになりました」というように認識している。外国語活動が、児童のコミュニケーションを促進していると捉えているのである。(2-①)そして、「今回、これで研究させてもらって、いろんないいところが出てきたので、その、低学年の外国語に関する意識とか、必要だに変わりました」と語り、その理由については、「この1年間で子どもの変容が直に見られたからです」と説明している。(3-②)児童が楽しんで授業に取り組み成長していく姿が、教師の意識を変容させたのだと考える。

研究指定については、「研究指定校はやっぱり勉強したことを発表したいとか、見て欲しいというのがありましたので、まあ準備なんかも大変なんですけど、どうせやるんならいろんな人に見て欲しい、広めたいというのはあった」というように語っている。(1-②)つまり、研究成果や自分の授業を公開しなければならないという条件が課されているのであれば、きちんとやりたい、評価されたいという気持ちの表れだと考える。

また、研修会で「実際にゲームをしたことが、すごい記憶に残って、子どももきっとそうなんだろうなと思って、実際に体を動かしながら楽しかったという思いがあります」と語っている。これは、コミュニケーションアクティビティーの実施を指している。座学だけではなく、体験的な学習を教師研修では求められてい

ると理解した。そして、「今年みたく低学年のうちから慣れ親しんで、英語に抵抗感が無く、耳から入っていく授業を続けていきたいと思います」と、今後も外国語活動・小学校英語活動の授業を推進しようという姿勢になっていった。

#### 【事例2：B（男性、38才）、教職経験8年目、H22年度6年担任、H23年度2年担任】

H24. 2. 20調査

Bは小学校の頃に同級生に帰国子女がおり、その友人との交友の中で異文化を感じていた。中学生になり、教科としての英語にも親しみを持っていたようである。「まあ比較的得意な教科」とも語っている。3年生になり受験が意識され、「覚えなきゃいけないとか、点を取らなきゃいけないとか、そんな意識」に変化したと述べている。親しみを持てる教科であった英語が、受験という要因によって、試験で点数を取らなければならない教科という方へと意識が変わったことが読み取れる。高校生になると、「もう完全に受験」、「完全に受験を意識しての勉強」になっていったと回顧している。コミュニケーションのための英語という考え方とは懸け離れていた。

その後、関東地方の国立大学教育学部に進学し、障害児教育を専攻した。教養部で英語が必修になっていたが、「学校の先生になるための勉強の、一般教養とそれがどういふふうにつながるかが全く分からなくて」と思っていたと語っている。

大学卒業後、Bは学校ではなく大手銀行に就職した。しばらくは銀行員として働いていたが、30歳ごろに東京都の小学校教師になっている。

外国語活動に対しては、「ALTが来て、授業をやってくれる」というようにALTに依存し、「授業としては完全にALT任せ」だったと語っている。「本当に意識の外にある小学校英語だった」とも語っている。

平成22年度に校内研究で外国語活動が取り上げられたことに対しては、「いやあ、正直迷惑だと思いました」と語った。「子どもたちの日常にない外国語というのが入ってきて、どう



決められたテキストもない中でどうやってカリキュラムを構成していったらよいのだろう」と悩んだという。(1-④) コミュニケーションとして英語という意識は実体験の中で培われているが、授業者としてはどうすればよいか困ったのである。

それが、6月の研究授業が契機となり、Cの意識は変化していった。「最初は訳分かんないじゃないかと不安に思って」いたと児童の反応に不安を抱いていた。だが、児童の反応は不安を吹き飛ばすものであった。「大人が子どもとやってもとても楽しくて、子どもが楽しそうだとほくもどんどん楽しくなって」きたと語り、さらに「もう相乗効果というか、子どもたちもすごい楽しくなって」というようにも語っている。(3-⑤)

そして、外国語活動・小学校英語活動は「目標ありきの活動なのですけど、それをどうやって楽しく、子どもたちは楽しくなるかということ、それを具体的に考えられるようになりました」とも語っている。つまり、授業に対する姿勢が芽生えたのだと考えた。(2-⑥)そして、4月当初の不安で困った状態から、外国語活動・小学校英語活動について、「子どもたちどうやったら楽しんでくれるか、そして英語好きになってくれるか」、「まずコミュニケーションをと、進んで取って欲しい」という意識へと変容していった。(3-⑥)これは、外国語活動・小学校英語活動の方法原理を理解し、児童の授業を楽しむ姿に触発されたものであると考えた。

#### 【事例4：D（女性、51才）、教職経験28年目、H22年度3年担任、H23年度4年担任】

H24.3.6調査

Dは地方で育ち、小学生の頃に外国語に接することは皆無であった。中学校や高校では、「英語の勉強がたいへん」ではあるが、「まあ、得意教科ではあった」と振り返っている。だが、「聞くとか会話は弱かった」と認識している。別の地方の国立大学教育学部に進学するが、そこでは、教養部で英語にふれたことがあるだけだったそうである。

教師になってからも、外国語とは縁遠い生活を送っていたようである。英語は「外国語が導入されるまではすっかり忘れてました」と語っている。

平成22年度に校内研究で外国語活動が取り上げられた時には、「実際に高学年じゃなかったの、まあ一緒に研究とかしていたんですけど、自分がやらないから、今一自分のものになっていないという感じ」だったと語っている。つまり、当事者意識に欠けていたのである。

平成23年度には、ともかく勉強したということである。研究指定によって、「無理無理そういう状態に追い込まれて、やらなけりゃいけないというか、だったのがよかったのかな」と回想している。(1-⑤)その中で、「この1年通して、全部英語でなくてもいいな、授業中全部英語でなくてもいいなって、使えるところで使って、あとは日本語でもいいかなと、気楽に考えられるようになったのは、すごく大きいと思います」というように、外国語活動・小学校英語活動の授業に対する緊張感が無くなっている。(2-⑦)

そして、児童の成長に対して、「簡単な言葉で英語でしゃべろうというのが、子どもたちになったのが、すごいいいなと思う」と評価している。(3-⑦) さらに、「小さい頃から簡単なことから教えていってあげれば、抵抗なく入れるかなと、すごく思いました」と考えるようになっていく。

Dの意識変容は、研究指定という強制的な圧力の中で、Dなりの授業の方法原理を身に付け、児童の成長していく姿に促されたものであると考えた。

#### 【事例5：E（男性、29才）、教職経験5年目、H22年度6年担任、H23年度5年担任】

H24.3.5調査

Eは、中学1年の時の英語教師がビンゴや英語の歌を活用した授業を行い、彼はそれを楽しんでいた。「中学校2年生、3年生の英語は本当に面白くなかった、文法とか、教科書を写すだけで、何も面白さを感じなかった」と感じていた。高校生の頃も、外国語学習には目が向い



ていなかったようである。

関東地方の私立大学農学部に進学した。大学生の頃に友人と海外旅行をして、「自分たちであっちの人とコミュニケーションを取ったりご飯を食べたり」したことが、「もうめっちゃ面白かったです」と回想している。他国の人たちとコミュニケーションを取る楽しさを味わったのである。

教師の家庭に育ったこともあり、通信教育で小学校教諭の免許を取得して教員生活を始めた。教師生活2年目に、JICAからアフリカのマラウイに派遣された友人を、現地に訪ねている。「生活水準低いんだけどは、日本人より楽しそうにしている」ことを、実際に「経験できたというのは、すごいよかった」と感じていた。実体験の重要性を感じていた。

だが、外国語活動の授業に対しては、「1年目は何していいかわからないというか、本当にもうALTがやってるんのを、後ろで聞いているだけ」だったそうである。

平成22年の校内研究が始まり、「若い先生もベテランも関係ないので、面白い研究」だと感じている。そして、「若い先生とベテランの先生がいろんな意見出し合って、しっくりはまったというか、面白い授業ができたので、よかったかなあと思う」と、授業研究に対して満足感を示している。外国語活動に対する抵抗感は、ここではあまり感じられない。そして、「外国語は将来、あの子たちが、世界のこんな国に行ってみたくか、あんな国に行ってみたくか、ていうようになって欲しいというのがすごいです」と語っている。Eにとっては、外国語は他国の人たちとコミュニケーションを取り、夢を広げるものとして捉えられていると考える。(2-⑧)

平成23年度になり研究指定が始まった。「外国語の授業、あの子たちはすごい楽しくて、やってくれました」と語っているように、児童が喜んで活動する姿を喜んでいる。(3-⑧)そして、「研究発表を経て、いろんなことを、いろんな方面からというんですかね、あの先生はこういう授業をやる、この先生はこういう授業をやるというのを見た中ですかね、ああこうい

うふうにやっていきたいなというのができた」というように、研究指定によって学ぶことができたと感じている。(1-⑥)そして、「授業やりなさいと言われたら、今ならばいいですと言える」というように、外国語活動の授業に自信を示している。

そして、Eは「将来的には6年生までに、こんなことを身に付けたらなあ、子どもが思ってくれたらなあということを確認にしていきたい」と前向きな姿勢を示すようになっていった。これは、研究指定を受けて学ぶ中で授業に対する自信をつけ、児童が喜んで活動する姿に触発されたものであると考えた。

#### 【事例6：F（男性、45才）、教職経験22年目、H22年度5年担任、H23年度6年担任】

H24. 2. 8調査

Fは小・中・高・大学生の頃に、あまりコミュニケーションとして英語にふれることはなかった。その後、関東地方の私立大学文学部教育学科に進学した。

小学校教師になり、D小学校の前任校で、外部講師による小学校英語活動の授業に接する機会があった。また、外国語活動の校内研究にも取り組んだ。「英語なんて、ぼくらの世代では教員免許取るときには全然ないものだし、ないものを教える、でも教える限り責任がある」と悩んだそうである。

平成22年度にD小学校に転勤になり、校内研究の研究推進委員長の役が与えられた。その職務を推進する中で、英語を教えなければならぬという意識から、「子どもたちにコミュニケーションを進んで図ろうとする気持ちを持ってもらうために、外国語活動をどう使うのか」(1-⑦)という考え方に変化していった。

平成23年度に研究指定を受け、研究推進委員長としてFは外国語活動について学び、「慣れ親しむこと」、「文化理解を深めること」、「コミュニケーションを図れること」の3点に重点を置いて研究授業を進めようという方針を出した。(2-⑨)そして、「授業研究が早い段階から、今年、今年度は始まりましたが、もう1年生が最初にやりますって、A先生、やりま

すって言われて、そのうち3年生の若い、彼が、Cくんが、じゃあぼくやります」というように、同僚教師が積極的な姿勢を示してくれたことを喜んでいる。

そして2年間を振り返り、「外国語ありきではなくて、コミュニケーション、それから異文化理解、そういったものやってくる中で、外国語活動ってもの果たす役割が大きい」と語るように、コミュニケーションや異文化理解という概念が、Fの考えの大きな部分を占めるようになっていた。(2-⑩) また、児童の成長について「英語で何かを伝えようという意識、が子どもさんたちには前より出てきました」と捉えており、それに対して「ありがたいなと思いましたが、で、逆に責任を感じました」とも語っている。(3-⑧) 児童の成長の様子を嬉しく思い、それに触発されているのである。

そして、「まあ外国語活動、来年はいいやということにならない」ようにしたいというように、積極的な姿勢になっていた。このような意識の変容は、外国語活動のコミュニケーションを中心とした授業原理が理解でき、授業実践を繰り返すうちに自信を持つようになり、児童の成長を喜び、一層前向きなものへとなっていったのだと考えた。

## 7. 6名の小学校教師の意識変容の事例から見えたこと

今回の6名の小学校教師への意識調査の目的は、外国語活動・小学校英語活動の研究指定校研究に取り組むことが、小学校教師の意識にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることである。

この6名のうち、CとEは大学生の頃に外国語によるコミュニケーションの楽しさを味わっている。Aも少し味わう機会があり、英語を話すことへの憧れをいただいていたが、教科としての英語には苦手意識を持っていた。BとDは、中学校や高校の英語は比較的得意教科だったが、会話に対しては、自分ではできないと認識している。Fは、コミュニケーションとして英語にふれる機会ほぼなかった。教員になり、前任校では外国語活動に関わってきた。CとE以

外は、コミュニケーションとしての英語を経験していないと言える。

6名に共通していることは、英語を専門としていないことと、外国語活動の校内研究が始まった時に、如何に授業をしたらよいかを不安に思ったり、困惑したりしたことである。

6名の小学校教師の意識変容の要因には、大きく分類すると三つ要素があった。

- ① 研究指定に対する意識に関すること
- ② コミュニケーション重視等の外国語活動の授業やその成果に関すること
- ③ 外国語活動の授業を楽しむ児童の姿等の児童の様子に関すること

では、まず「①研究指定に対する意識に関すること」から検討したい。Aは、「いよいよ自分もT1になって指導案作りから、ALTが先生でいないというところでやっていくのが、やっと実感として持たされるというのが…」(1-①) というように研究指定によって、自分が当事者になったと認識している。そして、「どうせやるんならいろんな人に見て欲しい、広めたいというのはあった」(1-②) と語っているように、やらなければならないのであれば、よりよいものにしたいと思っている。Bは研究指定を重荷に感じていたが、「嫌だという英語の概念が、変わったことは間違いない」(1-③) と感じている。Cは、「まず英語の授業って、どうやってやるんだろう」(1-④) というように困惑し、そこから授業研究が始まっている。Dは「無理無理そういう状態に追い込まれて、やらなきゃいけないというか、だったのがよかったのかな」(1-⑤) と感じている。Eは、研究指定というよりも校内研究についてであるが、「研究発表を経て、いろんなことを、いろんな方面からというんですかね、あの先生はこういう授業をやる、この先生はこういう授業をやるというのを見た中ですかね、ああこういうふうにやっていきたいというのができた」(1-⑥) というように学びが充実したことに満足している。Fは研究推進委員長として学び続ける中で、「子どもたちにコミュニケーションを進んで図ろうとする気持ちを持ってもらうために、外国語活動をどう使うのか」(1-⑦)

というように考えるようになっていく。

A、B、C、Dの発言から見えたことは、研究指定という強制的な圧力によって、当事者意識を持ったことである。Eの発言からは強制的な圧力を何うことができるものではなく、寧ろ学びを楽しんでいる。Fは研究推進委員長としてどうすべきかを考えている。Fの責任の重さから考え、研究指定の圧力はかなり働いているのではないかと推察される。Eの発言のように余裕を感じさせるものもあるが、その他は、不安や困惑の状況から、前向きに動き出すためには、研究指定という強制的な圧力が働いて前進したのだと考えた。

次に、「②コミュニケーション重視等の外国語活動の授業やその成果に関すること」に関することについて検討したい。Aはまず、「積極的に、自分から関わるようになりました」、「とにかく人と関わるというのを1年間やったおかげで、人のことを気にできるようになりました」(2-①)というように、コミュニケーションにおける児童の成長に目が向いている。Bは、「子どもが楽しむといった活動があったからこそ」(2-④)、児童が英語の聞き取りができるようになったと認識している。Cは、「目標ありきの活動なのですが、それをどうやって楽しく、子どもたちは楽しくなるかということ、それを具体的に考えられるようになりました」(2-⑥)というように、楽しめる授業をするという方法論を捉えている。Dは、「この1年通して、全部英語でなくてもいいな、授業中全部英語でなくてもいいなって、使えるところで使って、あとは日本語でもいいかなと、気楽に考えられるようになったのは、すごく大きいと思います」(2-⑦)というように、自分なりの授業の構えを身につけていったと考える。Eは、「外国語は将来、あの子たちが、世界のこんな国に行ってみたいとか、あんな国に行ってみたいとか、ていうようになって欲しいというのがすごいあります」(2-⑧)というようにコミュニケーションを重視した考え方をしている。Fも、「外国語ありきではなくて、コミュニケーション、それから異文化理解」(2-⑩)というようにコミュニケーション重視の考え方

になっている。

A、E、Fは授業実践を進める中で、教科としての英語、受験のための英語ではなく、コミュニケーション重視の外国語活動の授業原理を身に付けていった。BとCは、楽しい授業創りに傾倒していった。Dは日本語交じりの授業でよいという自分の考えに至ったのである。彼らが苦手とした教科としての英語とは異なることを理解したのである。

では、「③外国語活動の授業を楽しむ児童の姿等の児童の様子に関すること」について検討したい。Aは、「子どもたちもちょっといつもの授業とちがった面が見られたりすると、さらに私も楽しくなって、じゃあ次はこういうのやろうかなあと改善されたりですとか…」(3-①)というように、児童の授業を楽しむ姿に自分も楽しくなっている。Bは、「みんなの前で間違えたことやっても恥ずかしくないやっていた子が増えた」(3-④)と語っている。Bの授業に対する考え方は楽しい授業であり、それを実践してきたことから考え、楽しい授業の結果、児童が成長したと認識していると捉えている。Cは、「子どもが楽しそうだとほくもどんどん楽しくなって」(3-⑤)、「子どもたちどうやったら楽しんでくれるか、そして英語好きになってくれるか」(3-⑥)というように児童の授業を楽しむ様子に大きなインパクトを受けている。Dは、「簡単な言葉で英語でしゃべろうというのが、子どもたちになったのが、すごいなと思う」と評価している。(3-⑦)というように児童の成長を評価している。Eは、「外国語の授業、あの子たちはすごい楽しくて、やってくれました」(3-⑧)というように児童の姿を喜んでいる。Fは、「英語で何かを伝えようという意識、が子どもさんたちには前より出てきました」、「ありがたいなと思いました」(3-⑧)と語っているように児童の成長を喜んでいる。

A、B、C、Eは児童が楽しく活動する姿に大きなインパクトを与えられていると考えた。DとFは、コミュニケーションにおける児童の成長に目を向けている。前者と後者では観点は異なるが、児童の成長に対して喜びを感じてい

ると捉えた。

まとめると、大きな流れとしては、研究指定という強制力によって自分の問題として外国語活用を捉えるようになり、彼ら自身が経験してきた教科としての英語、受験のための英語とは異なる、コミュニケーション重視の外国語活動の授業原理を理解して実践を重ね、児童が楽しく活動したり成長したりという姿に間近にふれ、外国語活動の授業に価値を見だし、意識を変容させていったのである。

## 8. おわりに

本事例研究では、研究指定による強制的な圧力、授業原理の獲得、児童の授業を楽しみ成長する姿が、教師の意識を前向きなものに変化させたという結論を得た。

筆者は、本研究以前に東京都江戸川区B小学校とC小学校を取り上げた外国語活動の研修に関する事例研究を行っている。B小学校の研究では、「外国語活動が、小学校現場に無理なく定着するためにも、B小学校の例にあるように、支え合う職場の仲間による自由な対話と協同的な研究活動を大切」<sup>(20)</sup>という結論を得た。また、C小学については、「ロールモデルになる同僚やその実践があることも大きな影響を及ぼした」<sup>(21)</sup>と指摘している。

筆者は、全国の小学校が職場の集団と校内研究とを重視して、外国語活動等の新たな教育課題に邁進することを願ってやまない。本研究がそのための一助となれば幸甚である。

## 【註】

- (1) 平成10年の小学校学習指導要領の総合的な学習の時間における外国語活動を小学校英語活動と表記している。また、平成20年度の小学校学習指導要領の外国語活動は5・6年のみの活動であるため、1年～4年で外国語活動を実施する場合には、小学校英語活動と表記することにした。
- (2) D小学校は、次のような教員構成であった。平成22年度は、校長1名、副校長1名、学級担任17名(特別支援学級を含む)、専科2名、養護教諭1名である。平成23年度は、同じ職員構成

に少人数担当教諭が1名加わっている。英語に堪能な教師を配置する等の措置はなく、ごく普通の小学校である。

- (3) 江戸川区教育委員会指導室『江戸川区小学校外国語活動指導資料』(東京)、(2010)
- (4) 東京都江戸川区D小学校『平成22年度 研究紀要 進んでコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して～外国語活動を通して～』、(東京)、p.1、(2011)
- (5) 中山博夫 「異文化を楽しむ児童を育てる3年生の実践—アメリカ人児童と共に活動する学級活動と小学校英語を通して—」、日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL5、(創友社、東京)、pp.54-58、(1999)
 

中山博夫 「動物についての英語を楽しもう!」、名古屋市教育委員会『小・中学校における国際理解教育の手引』、(名古屋)、pp.62-63、(2003)等
- (6) 中山博夫・多田孝志 「外国語活動と国際理解教育」、日本国際理解教育学会『グローバル時代の国際理解教育 実践と理論をつなぐ』、(明石書店、東京)、pp.220-225、(2010)等
- (7) 中山博夫 「小学校英語活動のカリキュラム開発」、日本国際理解教育学会『日本国際理解教育学会 第16回研究大会 研究発表抄録』、(岐阜)、pp.54-55、(2006)等
- (8) 文部科学省 「第4章外国語活動」、『小学校学習指導要領』平成20年3月告示、(東京書籍、東京)、p.107、(2008)
- (9) 塚本美恵子 「Language Awareness(言語意識教育)による国際理解の育成」、日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL8、(創友社、東京)、p.12、(2002)
- (10) 吉村雅仁 「多言語・多文化共生意識を育む小学校英語活動の試み」、帝塚山学院大学国際理解研究所『国際理解』36号、(大阪)、pp.186-196、(2005)
- (11) 多田孝志 『対話力を育てる「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション』(教育出版、東京)、(2006) 『共に創る対話力 グローバル時代の対話指導の考え方と方法』(教育出版、東京)、(2009)
 

『授業で育てる対話力 グローバル時代の「対話型授業」の創造』(教育出版、東京)、(2011)
- (12) 名古屋市教育委員会は、平成23年度に第5・6学年の年間35時間のすべての外国語活動の授業に、実際に授業を推進する日本人の英語講師

- である「英語活動・外国語活動アシスタント」を配置した。
- (13) 中山博夫 「外国語活動の教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区B小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第7号、(目白大学、東京)、pp.47-59、(2011)  
「外国語活動に関する校内研究が教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区C小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第8号、(目白大学、東京)、pp.27-40、(2012)
- (14) 川又俊則、「第一章 ライフヒストリーとは何か」、『ライフヒストリー研究の基礎 個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教』、(創風社、東京)、P16、(2002)
- (15) 同上、P17
- (16) ライフヒストリー研究には、クリフォード ショウ著・玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー ある非行少年自身の物語』(東洋館出版社、1998)のように、一人の非行少年がどのような人生を送り何がその少年の性格形成に影響を与えてきたかを探るものや、塚田守著『教師の「ライフヒストリー」からみえる現代アメリカ 人種・民族・ジェンダーと教育の視点から』(福村出版、2008)のように12人の教師にインタビューしたもの等がある。
- (17) 山崎準二 「第三章 教師としての成長を支えるもの」、稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース』、(東京大学出版、東京)、p.79、(1988)
- (18) 東京都江戸川区D小学校 「平成23年度 研究活動計画」、(東京)、全頁3、(2011)
- (19) 中山博夫記録 「H23年度 東京都江戸川区D小学校 外国語活動 教員インタビュー記録」、(東京)、全頁61、(2014) 10時間以上のインタビューを実施し、それを忠実に文字化したトランスクリプトである。400字詰原稿用紙で211枚になるライフヒストリーを意識した記録である。
- (20) 中山博夫 「外国語活動の教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区B小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第7号、(目白大学、東京)、pp.47-59、(2011)
- (21) 中山博夫 「外国語活動に関する校内研究が教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区C小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第87号、(目白大学、東京)、pp.27-40 (2012)